

認知症イメージングテキスト

画像と病理から見た疾患のメカニズム

富本秀和，松田博史，羽生春夫，吉田眞理【編】

評者

池田 学

大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室

近年の進歩が著しく，出版が相次いでいる認知症の神経画像に関するテキストと思い込んで，この本を手にとった。しかし，良い意味で期待は全く裏切られた。図譜の半数は美しい神経病理に関するものであり，さらには各疾患の病態仮説や最新の臨床診断基準が丁寧に盛り込まれている。まさに，副題の「画像と病理から見た疾患のメカニズム」に沿った内容となっている。

序文にあるように，本書の出発点は，技術の進展とともに近年とみに距離が近くなりつつある神経画像と神経病理の関連を視覚的に理解できるようにしたいという編者の慧眼にある。わが国を代表する4人の神経画像と神経病理のエキスパートの協働により，このようなユニークなテキストブックが誕生したことを喜ぶたい。

本書はまず，海馬，前脳基底部といった認知症や高次脳機能障害

における最も重要な神経基盤について，MRI上の位置関係を画像と図譜を対比させながら丁寧に解説している。これから認知症臨床や研究を開始しようとしている初学者にとって，極めて有用な内容となっている。さらに，MRI SWI像やMIBG心筋交感神経シンチグラフィ，ドパミントランスポーターSPECTなど日常診療でも頻用され始めた新しい神経画像についての考え方，利用法と限界が丁寧に解説されていて，認知症の日常臨床に直ちに役立つ内容となっている。

神経病理に関しては，アミロイド β ，タウ，TDP-43， α シヌクレインなど主要な認知症の異常蓄積タンパクが美しい写真とともに，組織学的分類や重症度評価，臨床サブタイプとの関連で解説されており，臨床のエキスパートである認知症専門医にとっても，最新の神経病理学的知見を整理する機会



になると思われる。

最後に，アルツハイマー病など主要な各認知症の神経病理や分子生物学的知見に基づき病態仮説を紹介し，診断基準や臨床症状の詳細な解説とともに各種の神経画像の特徴的所見を紹介している。臨床医にとっては，遭遇した患者の疾患に合わせて，この最終章から読み込んでいくことも可能であろう。

本書によって神経画像と神経病理を両方向から学ぶことができるようになった恩恵を享受して，読者の認知症の病態理解や臨床診断技術がさらに進展することを期待したい。

B5判・頁266

2018年6月

定価：本体9,000円＋税

[ISBN978-4-260-03231-5]

医学書院刊